

明日に向つて開こう大代  
— みんなで智恵を出し合つて —

館長 橋 本 昭 二

『ひろば』創刊より百号、ひとえに編集委員の皆様や松井主事のなみなみならぬ御苦勞のたまものと、深く感謝致して居ります。

大田市に十八の公民館がありますが館報を毎月発行しているところは、大代をのぞいては一館もありません。本百号の編集に合わせて四十五年発行の創刊号を複製にして、御届け致しますので御覧下さい。

その中にS四十年と四十五年の人口推移を挙げ過疎の打開策をとの記事がありました。大代町の当時の指導者は将来を憂いて何かの手を打つべし、と警鐘を鳴らされておられます。しかし三十五年頃から続いた過疎現象のために、大代の人口は八百余人に迄減少してしまいました。もうこれ以上一人も

減らしてはならないと言う感が致します。

町民の皆様も色々活性化に向けて努力なさって居られ、大変御苦勞とは存じますが今一步大代町民、ひたいを合せ、智恵を出し合つて、『明日に向つて開こう大代』のテーマの通り、大代の将来に向つて直進して行きたいと思ひます。

『ひろば』発行百号を記念し、大代町の皆様の御健勝を御祈り申し上げますと共に御指導と御協力を得まして、更に二百号、三百号と続いて行くことを切望致します。

### 館報百号を祝う



元館長 原 田 秀 興

ひろば大代が百号発行となりました。その前身が「つどい」で第一号が45年11月に発行され、館長であった私は「(前略)町民間のパイプの役目を果し、公民館活動の一助ともなれかしと願つてやつと館報を復刊することが出来、つどい」と名づけられました。(中略)若い二葉を出したばかりであります。

あなたの温かい育成の水を待つております。」と、あいさつしております。

十七年前のガリ版刷りの館報を見た時、主事であった山根哲さんの献身的な活動の姿や、審議委員の方達が懐かしく浮かんで来ました。

主事が館長を育て、誠実をもって補佐する日々の積み重ねが公民館活動の原動力となり、「つどい」が誕生したと私は思っております。

その第一号で、『学校で教えない大切な科目を教えるのが家庭である。生活の中での親子のふれあい、話し合いによる心のふれあい、親の生活を子らは見守っている。

親を見習い自分の人格として積み上げてゆく人間づくりをしてゆくのである。(中略)

わが子を責める前に親自身が自分の生活を反省し、心の中でごめんね、とあやまる程のけんきよさと自責の念を持つべきではなからうか」と書いています。

活動資金が乏しいため発行回数が年三回、それも不定期でした。

公民館に保管されていた「つどい」

を見た時、当時の苦勞がとても懐かし  
く、久しぶりに愛児に会うたようで  
ありました。若い双葉が伸び育つて百号  
という節目を迎えましたことを皆でよ  
ろこび、今後益々公民館活動の原動力  
となりますよう念じることしきりであ  
ります。

## 町、活性化への悩み



元館長 尾崎 義徳

大代公民館報が発刊されて此度で百  
号に当るので何か感想をとのことです  
が、丁度私が館長として五年間昭和四  
九年四月、一〇号でしたから十三年間  
に九〇号発刊されたことになりました。

過去を振り返り、そして前進するこ  
とが大切だと思えます。最近大代の小  
中学校の生徒の数が減少して中学校の  
合併の問題が当町の将来への悩みの一  
つだと思えますが、今少し町民全体が  
真剣に考えねばならない問題だと思  
います。只、自分の子供が今中学校に通  
学して居るからとか、将来入学するか  
らと云う事でなく、一度廃校になれば  
将来二度と中学校は返って来ないと云

う考えに立つて考える必要が有ると思  
います。

過去中学校が焼けた当時、私は再建  
委員長として町民大会を開き、再三市  
教育委員会から合併を奨められました  
が、町民の総意で現在に至っています  
が、然し生徒の数が極端に減少して教  
育に支障が来る様になれば、これは問  
題ですから考える必要が有ると思いま  
す。

これから大代町を良くする問題につ  
いては種々意見や感想はありますが、  
紙面の関係から失礼させていたゞきま  
す。

## 公民館報百号を迎えて

——維持継続の難しさ——

上市 木村 富美子

三日坊主という諺があります。続け  
る事の難しさを解いたものだと思いま  
すが、それをのり越えて公民館報百号  
を迎えられた由、素晴らしい事だと感  
激いたしますと共に、心より御慶び申  
し上げます。

そのかげには館長さんをはじめ編集  
をされた方々の今日までの御苦勞がう

かがえるというものです。

聞きおよびますれば、公民館5代目  
の館長は私どもの父だとか、時の流れ  
の早さに今更ながら驚き感慨一入のも  
のが御座います。公民館活動をしてい  
る時、他人様のお世話をしている時が  
一番幸せなのではないでしょうか。

大きい仕事を任せられ、忙しさに追わ  
れている毎日、一つの企業を維持して  
いく事の大変さはいよいよもありません。  
んだんだんぎすぎすしていく自分が  
時たま悲しくなる事さえあります。そ  
んな時、届けられた館報の文章は私の心  
に、一時のゆとりを与えてくれる事で  
御座います。

どうぞこれからもお世話される方々  
は大変でしょうが、お世話の出来る幸  
せをかみしめながら続けて下さいませ  
事を祈つてやみません。

## ふるさと思考への

貴重な歴史

八反田 花田 幹子

ひろば大代——町づくりの一役を担つ  
て遂に100号——編集・投稿・印刷とそ  
れぞれの立場からの御努力の賜であり

公民館活動に深く感謝いたします。

みんなで誌したふるさと思考は、懐かしく貴重な歴史でもある様に思えます。

・各号を集録なさっている方は何人

・投稿者延人員は果して何人

・掲載内容の豊かさ、親密感

・21世紀まで続いて268号に……等々、

現在では都市交流も始まりました。とかく矢われがちと云われる精神面が、各号を貫いている事は、お互いの示唆収獲となつてほんとに有難いと思いません。

101号へと進展をお祝い致します。そしてこれを記念すべく、文化祭もこれまでのよき伝統に変身を加味して、今以上に老若男女、年一度の大代躍動の日になつたらと夢みるのでございます。

・文化講演会 町民意見交換会

・子供のお遊び今昔

・パーティー園遊会、フォークダンス

・実習コーナー

・芸能発表、カラオケ大会

・フアンションショー(リフォーム)……

等々、ほかにもあると思えます。何れ

かを組み合せて大代文化祭の特色である動と静の調和のよさが、変つた面から展開されたらと思いのままを述べて見ました。失礼致しました。

## 交流と年輪

タイプ担当 下市 市 原 孝 子

大代のくすんだ旧い家屋と増改築の済んだ新しい家屋を交互に眺めながら私は次の漢詩を思い出しました。

年々歳々花相似たり

歳々年々人同じからず

来る年ごとに咲く花の美しさに変りはないが、人の世は来る年ごとに變つてゆく、詩の意味を訳せばこんなふうになりましょうか。

この詩の通り菊の花は一輪二輪と咲き、大江高山の木々も昨年と變りなく紅葉を始めていますが、「ひろぼ」は以前とは除々に變りつゝあります。その中で多くの人達の交流があり、都市交流への展望があつたわけです。この場合の「人同じからず」は将来ある大代の生活上の為の意識的な變り方と言えましよう。

この百号が出来あがる迄に、如何に多くの人々の努力が必要であつたか、又基礎作り、積み重ねがどんなに大切なものであるかを学べた事は、忘れてはならない収獲といえます。

さて目に触れる「ひろぼ」はこんな変化を見せましたが、皆様の成長にはどんな変化があつたでしょうか。

たしかに今は一つの大きな變動期ですから、私達も時代・世相と共に變る時期にこそ心の動きなどを書き留めて、百号を迎える「ひろぼ」を記念して、寿命がこれからも延びる事ははつきり予測出来る我々の人生百才に向つてどう生きるかを考えないといけないと思えます。

## 随想

川上 熊 谷 徳 夫



去る十月の中旬に、ある会議に出席のため久し振りに四国に渡りました。連絡船の上から、秋の瀬戸内に威容を現わしつつある今世紀最大の建造物といわれる瀬戸大橋を望むことが出来ました。

そのスケールはケタ違いで、総工費一兆一千三百億に及び、五つの島を六つの巨大橋でつなぎ本州と四国を結ぶのです。来年の四月十日の開通を控えての完成工事が急ピッチで進められていました。

この巨大橋の上を、車のみでなく列車も同時に走らせるのだから、本当に最近の技術進歩には只々感心するのみです。その反面、多くの歴史を作った連絡船も今年限りで幕を閉じるそうです。時代の変遷を目のあたりにする思いで帰ったような訳です。

そんなある日、新聞のコラムに次のような記事が載っていたので、非常に興味深く読みました。紹介しますのでそれぞれにイメージして味わってみて下さい。

それは『その昔、讃岐の国の村人達は、キツネのいたずらに悩まされていた。それを見兼ねた空海が、四国のキツネを呼び集めて、「鉄の橋が架かるまで帰ってはならぬ。」と本州に追放したという。

こんな郷土伝説が香川県に語り継がれている。空海は讃岐の生まれでの子

の弘法大師さまである。つまり四国と本州を結ぶ橋を最初にイメージした人はお大師さまという次第。

もっともお大師さまの措置は「よもや鉄の橋など架かることはあるまい。」と踏んでの永久追放宣言であった。

この千二百年前の伝説からも、うかがえる四国の人たちの悲観的な架橋観が、夢の架け橋建設へと変わったのはいつかとなると、公式の記録は明治二十二年の香川県会で、大久保謙之丞県議が「本州へ大橋を架ければ風雨の憂いなし。」と提唱したのが最も古い。それからざっと百年、まさに夢が現実のものになるうとしている。

空から見る瀬戸大橋は、まるで四国と本州が綱引きをしているようだ。果たして人はどちらに流れているか。間もなくお大師さまの禁の解ける日、いたずらキツネたちに聞いてみたい」と記者は記事を結んでいる。

町民の声のひろば  
としての魅力を

『ひろば』は地域住民のための公民

下市 熊谷 正 範

館活動の姿と地区民の意志とを結ぶ唯一のパイプの役割をはたしながら幾星霜、このたび一〇〇号の発刊にあたり心からご同慶申し上げます。

未来を拓く地域社会発展のため、尊い人生のあゆみや生き方、ふるさとへの夢を「ひろば」におよせなさいました皆様に敬意を表します。編集委員の方々の並々ならぬ努力に対し衷心より感謝を申し上げます。

「ひろば」はふるさとの歴史や文化、農業や職場、団体の活動状況、芸能や趣味、健康体育行事、過疎、山間へき地、教育の課題、高令化社会への対応、地域の活性化事業、生涯教育等、町民はどう取り組み解決したらよいか、真しな意見を結集し、町民の声の広場として魅力あるもの、更にふるさとを愛しながら活躍されておられる方々と「ひろば」を通して心の交流をはかることは一層意義があるものと存じます。 「ひろば」は進みつつある大代の姿を表徴し、町民ひとりひとりが生きる喜びと感謝、理想の郷土を希求しつよいよいよの充実発展を祈念しております。

# 「ひろば」万歳

下市 渡 敏 子

「ひろば」発行一〇〇号お目出度うございます。お祝の言葉と共に編集部の皆様毎月御苦勞様でございます。

町のあらゆるニュースや月に似合った記事等、今月はどなたが書いていられるかお名前を見るのも楽しみの一つです。私も四年間編集部のお手伝いさせて頂きましたが、原稿をお願いして断られると本当にガツカリですが、反対に心よく引き受けて下さった時の嬉しい事、ホッと致します。

出した言葉は消しゴムで消せないけれど、鉛筆で書いた文字はいくらでも消す事が出来ます。自分の書いたものが活字になると何か新鮮に見えるのもアラアラ不思議……。まだ一度も投稿していられない町の皆様、どうか書く喜びを味わって頂き度いと思います。大変僭越な事を申しましたが、「ひろば」が東京や九州など町出身の方々のお手元へ届き、都市とふるさとを結ぶ明るい町づくりの大切な一環になっ

ていると思います。今后共「ひろば」が益々発展します様お祈り致します。

## 秋 白 和

運営委員 横 手 昌 則

風に負けない僕のお気に入りのスタジアムジャンパーを着て、鉢物用の腐葉土を作る為に近くの森へ落葉拾いに出かけた。サワサワと風に揺れる木々の音、カサカサと重なり合いながら地面を走る枯葉の音、やわらかな秋の陽ざし。

つい先日、東京へ行った。狸の出そうな(出る)田舎道から朝まで眩しい夜のハイウェイを突っ走って……。

東京の風は冷たかった。空気が乾き過ぎているのか風が硬い。四角い風。

でも今の季節の方が空は澄んでいるみたい。首都高速からどこかの家の庭が見えた。柿の実がなっていた。ピルの谷間に柿の木のがある家、そのアンパランスが面白い。あの辺は地価がどうこうなんて言うのは野暮。都会のウサギ小屋より田舎の家の方が地価は安くても人の住まい、と言う気がする。

東京旅行で心に残ったものってそんなに無いな(東京の人ゴメンナサイ)。東京にはいったい何があるのだろう。東京は一つの巨大なセンターだ。全国各地、外国から人や物、情報が集まって来る所。ここにいるいろんな文化が混じり合って一つの東京スタイルを作るのだと思う。でも僕はそれを追いかけない。田舎の土着文化を大切にしていきたいから。

## 館報百号

### 青い鳥を追って

編集委員 渡

敏 昭



大田市と町内の役を色々と務めて活躍されていた、亡き花田三郎先生がよく私に話された中に「大代が他町に自慢すべき活動分野が二つあり、一つは意気盛んな婦人会活動、二つ目は公民館報の継続発行、然も大代では毎月発刊され他町も敬服している。」との言葉が私の頭の中に強く残っている。

続く事、続かせる事、これはなかなか難しい事である。日常、私の取り組む体験の中に健康対策として、思い出しては実行にかかるラジオ体操、乾布

摩擦、或いは朝の散歩、他にあげれば日記や草取り等々、こんな至極簡単な事でさえ三日位で終りがちである。

ましてや体験者が皆悩んで来た至難な原稿集めと、やゝ脳の働きの必要とする編集、そして活字にする迄の種々雑多な段取りの中を、配布にまでこぎつけていく苦勞はやってみなければ味わえない至難のわざである程に、この「ひろば大代」が百号迄、中途欠けることなく続いた事は編集に携わった私共としても誇りに感じている。

然し乍ら、続いたとは言え内容に若干問題もあるやに思われ、気づかれた人は炬燵話や、暇つぶしの一人ごとの話に留めず、どしどし公民館の方へ意見や要望を具申され、又編集会では進んで改善を加え、より親しく、より身近に語り合い、学びあう「ひろば」として有益で立派な館報をお届けしたい。

## 十年一日の如く

右原 斎 藤 康 子

大代へ嫁いで早や二十年が過ぎてしまいました。農作業をはじめ何も知ら

ない、ただ若さだけが取り柄の私でした。こんな私も地区の皆様を初め多くの方々のご指導と励ましのおかげで今三人の子供も社会人に、進学にそれぞれ親もとを離れていきました。

子供が小学校へ上がった頃、冬は学校道の雪掘りや明け暮れておりましたが、今では八反田、右原、久具、飯谷と結ぶ立派な市道も出来、雪で閉じこめられることもなくなりました。

顧みますと、ただひたすら一生懸命で、後をふりかえる余裕もない二十年だったようで、今思いますと「ああすればよかった」「こうもしたかった」など反省することばかりですが、元気で巣立ち、主人や子供達にも感謝しております。

毎日が夫婦二人の生活になり何かと会話も少なく、外に出かけることも少なくなりがちですが「井の中の蛙」にならないよう奮起一番、これからの生き方を考えて見たいと思っております。



## ひろば百号に出合つて

編集委員 藤 井 房子

百号おめでとうございます。これまで努力下さった館長、主事、編集委員、並びに町民各位のご協力に敬意を表します。

百号の積み重ねを振り返ることで、大代町の歴史を考えることも出来、貴重な資料に発展するものと信じます。創刊号に記されている過疎の動きは今もって、町民の関心事実でもあり、何とかしなければならぬ、大きな務めだとも考えます。その動きの一つとして生まれた「ふるさとと、都市を結ぶ会」の記事が、最近の「ひろば」の中でも、広いスペースを取っていることでもうなずけます。

町民の総力で達成した「ふるさとと都市を結ぶ交流会」、「東京石見高山会」に参加された方の、にこやかな笑顔、お互いが言葉を選ばず交わす話し言葉、心を開いて語り合える、同郷の者でなければ味わい得ない嬉しさ一杯のなつかしさも思い出されます。

大代を本籍地とする多くの方々とも手を取り語り合い、時代に遅れない大代町の発展を考え、子孫に継承せねばと、責任の重大さを感じます。皆の考えを伝え、知り合うパイプ役としての「ひろば」の重要性を考え、町民各位の努力により増々の発展をお願い致します。

皆さんの努力によって  
培われた百号

編集委員長 渡 淳

館報「ひろば」は、昭和四十五年十一月に「つどい」として第一号が発行されて以来、ここに百号を迎えることになり大変喜ばしいことです。

私が編集の一員として携わったのが五十八年六月四十六号からで、約五年間紆余曲折はありましたが、各月欠号なく発行できたことは、偏に玉稿をいただいた皆様方の御協力の賜であり、編集委員の方、松井主事、横田さん、多忙の中タイプを打って下さった市原さん等関係各位のお陰によるものと深く感謝いたしております。

「ひろば」は、大代地区唯一の公報

誌として、地区文化の向上に、地区の活性化に大きく貢献してきました。都市とふる里を結ぶ交流の会も、館報を郷土出身者へ発送したことがきっかけとして起こり、いまや、「ひろば」はふる里と都市を結ぶ掛け橋となっております。

「ひろば」は地区民、郷土出身者、老若男女を問わず巾広い玉稿によって成り立っている皆さんの「広場」であります。

「継続は力なり」という言葉がありますが、更に充実発展に努力する決意であります。皆様の御協力、御愛読をお願いいたします。

公民館も四十年の齡



昭和二十四年公民館創立発足以来、四十年目を迎えるとしています。

- 初代渡昌雄・松島定範・小笠原恵利  
長 原田秀興・木村顯三・尾崎義徳  
館 高崎 章・花田三郎・日向重守  
橋本昭二 (敬称を略す)

以上十名の方々の努力の積み重ねと歴史の流れによって今日を迎えている

訳ですが、既にお二人の方が故人となられ、当時の人口も亦、著しい経済成長によって変化して行きました。

年度	世帯数	人口
大9	479	1,838
昭5	428	1,668
22	—	1,982
25	469	1,966
30	464	1,918
35	446	1,733
40	391	1,438
45	365	1,209
50	331	999
55	313	895
60	301	834

すさまじい人口の流出を繰り返し、改めて当時に感慨を思い起こします。

年末特別警戒

大代駐在所 福 間

師走を迎えると誰もがあわただしくなります。その為にちょっとした心のスキを突いた犯罪や事故が発生します。「特に空巣、乗りもの盗み、ひったくり等が多く発生する時期です」

また、交通事故も冬本番を迎え、積雪や路面凍結などにより、思わぬ事故を起こすものです。

したがって「ゆとりある心」と「注意心」をもって、平穩で明るい正月を迎えらるる様にしましょう。

— 事故のないお正月を —

俳句

―あすなる句会―



下谷 尾崎三枝子

。石路の黄惜しみなく里日和

飯谷 武田 鳥子

。鱗雲岬遙かに潮平ら

椿 柿丸 寿枝

。日を慕う玻璃戸の蜂や日短か

八反田 森 信子

。五十路すぎ友との出会い秋今宵

八反田 松井シゲノ

。庭先を山茶花コスモス飾り居り

下市 渡 あやこ

。冬ざれの潮路はるかや浜に立つ

東京石見高山会出席

公民館主事 松 井 幸

夜行便、広島から中国縦貫道へ、深

夜のハイウェイをひたすら東へ、東へ。

夜とは言え、すれ違ふ車の音にも、す

ごいスピードを感じました。

もともと夜の旅行は嫌なものです

が、お酒やウィスキーの助けを借り乍ら、

ガヤガヤ、ワイワイ……。寝つかれない

まま、窓ごしに展ける夜景を楽しみ乍

ら翌朝九時東京着、曇天の為、途中富士山の姿を見る事は出来ませんでした。都心に入るに従って、さすが人口一千万都市、ひしひしと重圧を感じました。宮城、靖国神社、東京タワーなどの観光を終えて午後、石見高山会の総会が始まりました。

役員改選が行われ、長年に亘り石見高山会の創立に貢献された渡俊則さん、米原光義さんが勇退され、会長には上市出身の田中憲経さん(安田銀行常務)事務局長に佐藤定雄さんが選任されました。田中さんはヨーロッパへ出向中で博子夫人の挨拶で始まり、石田大田市長の祝辞講演などがありました。

職人あり、サラリーマンあり、会社の社長あり重役あり、大学教授も居られれば僧職もと言った様に多種多様な郷土出身者の大活躍は頼もしい限りでした。何十年振りの出合い、見覚えのある顔、なつかしい顔、交流会は和やかに、はなやかに賑わいました。

郷土芸能、坂本春夫さん、竹間猛さんの盆踊口説、田植ばやし、神楽の神歌、大田友義さんの録音などが流れ会場の雰囲気盛り上げていました。

翌朝五時半、松野広さんの御好意と御案内により、築地の魚河岸を見学に出かけました。隅田川の河畔一帯にあつて日本一と言われ、首都の台所を受け持つ供給源、そのスケールの大きさには只々目を見張るばかりでした。活気などそこ抜け、人の群、大魚マグロの群、活魚の群、何十億の取引が一朝に行われるとか。

「魚河岸に無いものが二つある」それは葬儀屋と何とか(縁起でもない)銀行から証券会社、郵便局を始め、都民の生活の要を充たすあらゆる出先機関を内臓しているとの事、迷子にならぬ様、必死の努力が払われました。

帰路は天下の煥箱根に一泊、正月の二・三日行われる関東大学駅伝の地となる古淵園、鷺明学園、あしの湖など放送でおなじみの地を目のあたりに……。さて当日の天気は快晴そのもの、期待の富士を間もなく見出した時は、車中から思わず大喚声上がり皆がかたずを呑みました。先夜からの冷込みで頂上に冠雪を戴いた絶景の富士山、そのおおらかな雄姿、裾野に展ける大自然の姿……正に日本一の景観でした。